

ミンダナオ子ども図書館について 松居友氏（子ども図書館創設者 マノボ族酋長）

平成30年5月31日 ウィル愛知

笑顔に溢れた戦争孤児たち

戦争で両親を亡くしたり貧困に喘いだりした青年たちを招いての研修でした。重い内容の研修会になると思いきや、全くの正反対。彼らは生きる喜びに満ち溢れていました。歌や踊りも披露してくれたのですが、信じられないほど生き生きとしていて「歌や踊りを見てほしくて仕方がない!」といった様子でした。



屈託の無い笑顔、自国文化への愛…重い過去を背負った彼らを何がこま
で生き生きとさせたのでしょうか？

簡単に子どもたちも好きそうな踊り。「この曲の日本語版無いかな？」という意見も出ました。

ミンダナオ子ども図書館

フィリピンでは2012年までの約40年も内戦が起きていました。被害に遭った戦争孤児や貧困に喘ぐ子どもたちをどうか元気にしたいと、松居友氏は2001年に「ミンダナオ子ども図書館」を創立しました。絵本が好きだった自分の幼少期を思い出し、少しでも子どもたちに勇気をあげたいという願いからです。

その活動は戦争孤児の受け入れや学校に行くのが困難な子どもたちの援助へと広がります。今まで550人ほどの子どもたちを学校へ輩出しました。

今でも100人ほどの子どもたちが図書館にいて共同生活をしています。いつも誰かに存在を意識され、また自分も誰かの存在を意識する環境がここにはあります。昔の日本でも当たり前だった人と人との繋がり、心の温かさに満ち溢れた生活を送ることができる環境での生活が彼らを笑顔にできるのでしょうか。ここにいる子どもたちは歌や踊りや遊ぶことが本当に大好きで、毎日生き生きと生活しています。

もう少し細かく図書館での生活をお話します。ちなみに今回の講師である松居氏は、後に功績を認められマノボ族の酋長に任命されています。

図書館での生活は当番制で行います。食事係は朝の4時半から支度を始めるというのに、どの子も嬉しそうに準備をします。今まで貧困のために食事を取ることが困難だったり、大事な食材を触らせてもらえなかったりした子も多いのです。日本のように十分とは言えませんが、食事を食べられる幸せと一緒に作ったり食べたりする楽しさを感じながら子どもたちは生活しています。



収穫を祝う踊り。子どもたちは教わらなくても、遊びとして勝手に覚えていくそうです。

また、たまには文明の利器に頼ろうと洗濯機を購入したことがありました。

しかし彼らは洗濯機を使いませんでした。理由は「みんなで一緒に洗濯をしながら話をする楽しい時間を、なぜボタン一つでおしまいにするの？」という驚くべきものでした。

宗教はバラバラですがどの宗教もみんなが認め合い、どの宗教の大事な日でもみんなで祝います。大切な家族が信じている宗教をどうして卑下できるでしょう。

ある日、キリスト教の子がイスラム教の子の為に「モスクが無いなんてかわいそう」とモスクを建てたこともありました。今でもそこでイスラム教の子は神に祈りをささげています。

絵本の読み聞かせのために超危険区域といわれる場所まで行きます。まだまだ貧困に喘ぐ子やテロの被害に遭っている子がいます。そんな子どもたちのために現地へ赴き絵本の読み聞かせ活動をしています。

子ども図書館の青年たちも毎回自主的に参加してくれます。彼らは林の中で、ブルーシートの上に座った子どもたちに訴えるように絵本を読み聞かせます。「しっかり聞いて覚えておきなさいね」とでも言わんばかりに。彼らは言葉の分からない日本語版の絵本でも話を勝手に作って読み聞かせてしまいます。絵本の持つ力はすごいです。ただ、銃を持った大人がテロからの襲撃を護衛してくれての読み聞かせ会なのですが。

日本人が失ったもの

今回、共に来日した彼らは日本の文化に触れることをとても楽しみにしていました。四季を感じてみたい、きれいなトイレを体験したいなど様々な夢があったそうです。

ただ、彼らと日本人の自殺率について話したときに「何でこんなに便利なのに自殺なんてするのだい？」と、とても不思議に

思ったそうです。

便利な社会になった日本は今、人と人の繋がりがとても希薄になりました。「便利」を優先した結果、多くの日本人がどこかで「孤独」を感じているのではないのでしょうか？

便利な社会で生きる私たちはついつい「心の壁」を作りがちです。しかし日本から帰り、子ども図書館に戻ればそんな壁は必要ないことに気づかされます。そして、私には帰る場所があることを改めて感じさせられます。なぜならここには私を必要としている家族がいて、そして私にもこの家族が必要だからです。

みんなに聞いてみた

Q.日本に来て驚いたことは？

A.高層ビル、長い橋、電車が通っていること、トイレの綺麗さや便利さ、ごみが落ちていない、温泉で全裸になること

Q.将来の夢

A.ファッションデザイナー、教師、レントゲン技師、起業したい、立派な船乗りになりたい、自分の国の子どもたちを貧困から助けたい

意外にも日本と似ている子どもの頃の遊び

目隠し鬼、後ろの正面だあれ、ハンカチ落とし、ゴム跳び（輪ゴムを繋げたものを使う）、馬跳び

外国ならではの遊び

野球：拾った木がバット。でもボールも拾った木。球ではない。

ままごと：拾った木々で家を作ってままごとをする。その前で本物の火を使い焚き火や料理作りをする。

アンケートまとめ

私たちには想像できない経験をされている現地の方と実際にお会いした研修だったが、とても楽しそうに歌や踊りを披露してくれたのが印象的だった。毎日のように悲しいニュースが飛び交っている中で、本当に大切なことに気づかせていただいた。

私のクラスでも3歳児ならではの喧嘩などあるが、ただ止めるだけでなく、絵本の読み聞かせなども取り入れ、愛を持って接

することができるようにしたいと改めて思った。

実際に見る事ができ、本当に楽しさが伝わってきた。つらい経験の中でもしっかりと夢を持ち進んでいることに心をうたれた。

今回の研修に参加して、とても楽しそうに歌っている姿が印象的だった。見ているこちら側まで楽しくなれた。歌や何かを表現することは本当に楽しいことだと改めて感じた。また、人工的なおもちゃなどがないからこそ、考えあったり知恵を出し合ったりしてしないといけないし、そこには人とのかかわりが必要だ。やはり、助け合い、友だち、という存在は大切だと感じた。

人とのつながりの大切さを本気で感じた。参加できてよかった。

映像を見ていてとても懐かしく胸が熱くなった。貧しくて電機やガスなどもなく生活環境は豊かとは言えなくても、人と人の心の繋がりや絆が感じられ、お金なんて無くてもたくさんの愛であふれていることが感じられた。自分のことよりも相手を想うことの真の大切さ、また恵まれた幼少時代とは言えなくても表情からお金では買えない豊かなものや、時間を感じる事ができた。

異文化交流のようで知らない世界を知る機会となった。物の豊かさが幸せということではなく、心の豊かさが幸せ、小さな幸せで喜べる事が真の幸せかもしれないと感じた。異文化を学ぶ事によって自身の環境、そして子どもたちの環境、そして未来を考えさせられた。

日本の子どもたちも、子ども図書館のようなところがあり、言語や宗教が違っても触れ合える環境があると変わっていけるのではないかなと思った。また、戦争が原因で子どもたちが犠牲になってしまうのはつらい現実だなと感じた。この研修で、このような人がいて、こういう遊び方や過ごし方をしているということの間近で感じ学ぶことができたことが良かった。ミンダナオのことを知ることが出来てとても良かった。

第1回目から、とてもすばらしいお話を聞くことができた。辛い経験をした子どもが変わっていく姿や、どうして笑顔で過ごすことができるのかを知ることができた気がする。いろいろな話を聞くことができ、日本と考えが全く違うこと、社会の違いや

考え方を学ぶことができ、フィリピンの子どもたちの生き様にはとても感動した。友情の大切さ、愛を持って接する姿、助け合い、またこれらは周りの環境もあってだなと感じた。また、絵本の大切さ、語りのすごさを感じる事ができた。

改めて日本の子どもたちが恵まれていることを感じ、恵まれているのにいろいろな問題があるのはなぜかと感じた。豊かな生活の意味をしっかりと考えていくべきだと考えさせられた。

いろいろな背景を持った現地の方がとても生き生きとした表情で歌い踊る姿を見て、どう生きるかを考えられる人は大きく育つのだと改めて感じた。

絵本の読み聞かせをはじめ、踊り、歌、遊びは世界共通だと思った。どんなに貧しくとも友だちがいる、親がいなくても家族のような繋がりを感じ生きている、そんな彼らの歌にはぐっとくるものがあった。自分の心が洗われたようだ。日本の子どもたち、私のクラスの子どもたちへ、まずは明日の読み聞かせから気持ちを新たに心から楽しんで読みたいという思いに変わった。また子どもたちの自然性をどう育てていけるか考えていきたい。

松居友先生のお話は以前にも聞いたことがあったのだが、今も活動を続けている先生のお話には今回も心が響いた。松居先生の言葉はずっとこれからも心に残っていくであろう。また、歌や踊りは人の心を解放すると改めて感じた。

きらきら輝く瞳、素敵な歌声に出会えて良かった。環境を大きく捉え、もっと大きな視点で様々な物事を見ていかなくてはと思った。

語り継ぐこと、人と人とが関わること、それらが繋がって生きる力になることを感じた。絵本の持つ力の根本を知れた気がした。どんな環境にあっても自分を磨く、人を思う、分かち合いを大切にする、この精神は今の日本に必要なことだと思う。

危険も沢山ある中で子どもたちを救いたいという思いで行動されている姿に心打たれた。子どもたち一人一人が生き生きとした表情で辛いことがあったように見えなかった。それだけ子ども図書館が子どもたちにとって家庭と同じような大きな役割を果たしているのだと感じた。

素晴らしい演奏や踊りを見せていただいて、とても楽しく、また私にも刺激になった。今の日本は様々な物が溢れているが、そんな物が無くても身近にある物で子どもたちは遊びを作り出す力を持っていることを改めて知らされた。日本の子どもたちの心もこんな風に豊かに育っていくよう、私たちも日々保育を行っていきたいと感じた。

とても多くのことを感じる事ができたが、あえて感想をと言われると言葉にできない。自園でもフィリピンの子どもが4人ほどいるのだが、母親の弟が殺されたという子もいる。思うことが多すぎて言葉にできない。

とても素敵な歌や踊りだった。絵本や歌はみんなを笑顔にする力があると実感した。とても思いやり溢れる温かく愛情いっぱい場所なのがよく伝わってきた。物的に裕福な環境だからといって心が豊かになれるわけではない。私も今の生活が当たり前になってしまい、感謝の気持ちを忘れていたと改めて感じた。子どもたちの心が、自然と心豊かに育つような環境を作りたい。

「生きる命」を充分に感じ、また考えられる時間だった。辛いことがあった子どもたちが、こんなに前を向いて生き生きと踊ったり歌ったりしている姿を間近で見て心が動いた。自分の受け持っているクラスの子たちや国の子たちとのかかわりを見直さなければいけないと思った。愛をもって接すること、みんな友だち、家族、平和が一番。本当にそのとおりだと思う。私も元気をもらった。

子どもたちの幸せを願い、異国の地で活動を行う松居さんの素晴らしさに感動した。そこで暮らす子どもたちは本当に心から幸せに包まれているのだなと思った。私たちには想像もつかない試練を乗り越えて生きてきたと思う。そんな彼らが力強く生きていることを実際に彼らが目の前で見せてくれ、松居先生がいろいろと話してくださった。その全てに「今を大切にしないで」と生きていくことの意味を考えさせられた。園にいる子どもたちの未来のためにも一日一日を大切に、子どもたちの笑顔を絶やさぬよう接していこうと思った。

研修会で、実際の歌や踊りを見たり聞いたりできるとは思わなかった。言葉や文化は違うが楽しそうに生き生きとしているのが感じられた。発展を遂げた日本なのに自殺が多いことを疑問に感じた彼らたち。「孤独」とは周りの環境が作り出しているのだと感じた。日本よりもはるかに大変な環境で育ったにもかかわらず、生き生きと楽しく過ごせているのも子ども図書館があ

るからこそだと考えると、子どもたちの笑顔を作り出した松居先生はすごい。子どもの育ちを考えるという視点から外れ、まずは笑顔を生み出していきたいと考えようと思った。私も松居先生の生き生きした姿を見習って働こうと思う。

両親を亡くしたのにも関わらず、子ども図書館というたくさんの友だちと親代わりの松居先生たちと過ごすことで、自然に助け合いの心が身につき、みんなが一つになっている様子が映像や実際のお話からとてもよく伝わった。過去の辛い話ができるのは、どんな時も周りにいる人たちの愛を感じることができたからこそ、過去を乗り越えて話せるのだろうと思い感心した。歌や踊りでは真剣な様子、楽しそうな様子が間近で見られて良かった。歌の意味は分からなかったが元気な歌声に感動した。

悲惨なことがあっても素敵な心に育ったのは与えられた環境が良かったからだと思う。保育の中でいかに良い環境、自分たちで考える気持ちの大切さを伝えることこそ大事だと感じた。

お互いを評価しあわない、お互いに尊重できる人間として認め合える集団作りをしたい。遊びで繋がる仲間…絵本で愛をいっぱい伝えたい。生きていることが楽しいと感じられる子どもを育てたい。